

主 題：死者は必ずよみがえる

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章12-20節

以前、バプテスマを受けたばかりの一人の女性が学びに参加してくれました。ある日、主イエス・キリストの復活のメッセージを語った時に、集会が終わってから、彼女は私は復活を信じていることができないと私に告げました。大変大きな問題です。我々が考えなければいけないのは、主イエス・キリストの復活を信じなくても救いを得ることができるのかどうかです。イエス様の復活というのはそれほど重要ではないのかどうかです。もう皆さん答えはおわかりですよね？主イエス・キリストの復活は重要です。イエス・キリストの福音の中心的な真理です。主イエス・キリストの復活を信じないで、この救いにあずかることはありません。

◎主イエス・キリストの復活の重要さ

パウロはこの復活の重要さについていま一度コリント教会の兄弟姉妹たちに教えます。というのはイエス様の復活というのは私たちに希望をもたらすものです。私たちに救いの確信をもたらすものです。願わくばきょうのみことばを通して、あなた自身がもう一度イエス様の復活の重要さに気づいてくださること、それを思い起してくださることを心から願います。

Iコリント15：12で「ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。」とみことばが教えます。この当時、まだ主イエス・キリストの復活を目撃した人たちが存在していました。またコリント教会はパウロから復活の事実とその大切な意義を教えられてきたはずですが、それでいて自分たちの復活については疑いを持ち、信じていない人たちがいたという始末。少し驚きます。なぜパウロからこの教えを受けていながら、自分たちの復活を信じない者たちがいるのか——。もちろん考えられることは、教会の中にもう既にいたのか、後に入り込んできたのかわかりませんが、偽りの教師たちが入り込んで来て、真理を惑わしてしまうということはいつものどこにあって私たちが知ることです。そういう人々が常に存在するのです。また同時に、彼らはギリシャ人です。ギリシャ人としてこれまで教えられてきた復活を歓迎しない教えも、自分自身の復活を素直に受け入れる障害であったのかもしれない。

よく考えてみると、私たち信仰者というのは神様が何を言われるのか、神様のみことばを真実として受け入れる者たちです。我々がこれまで培ってきた思いや考え、経験ではなくて主のおことばに従う者たち、それが我々信仰者です。決してコリント教会の人たちのように、いろいろなことに惑わされてはならない。我々がすることはこの神様のおことばにしっかりと立つことであり、そしてこのみことばは私たちに復活がいかに大切なのかを教えてください。

きょう私たちが見ようとしているテキスト15章を通して、繰り返しそのことを教え続けているのですが、私たちがこのレッスンから学ぶことは何かというと、我々ひとりひとはクリスチャンだけではなく、すべての人間は必ずよみがえるということです。では何を根拠にそう言うのかというと、主イエス・キリストの復活です。イエス様が復活なさったという事実がすべての人間が必ずよみがえることを明らかにするのです。パウロは13節から再び主イエス・キリストの復活の意義について教えています。13節に「もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。」とあります。16節にも「もし、死者がよみがえらぬのなら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。」とあります。よく似ていませんか？また14節には「そして、キリストが復活されなかつたのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、」とあります。17節は「そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。」となっています。非常に似たメッセージが13節と16節から記されています。

つまり確かにことばは違いますが、パウロは同じことを繰り返しています。見ていただくと13節も16節もどちらも「もし」と接続詞がつけられています。パウロは仮定法を使って復活の真実さと復活を信じないことの愚かさを読者たちに改めて教えます。同時に、このメッセージを繰り返すことによって、復活の重要さというものをパウロは改めて人々に教えようとするのです。なぜパウロがこの復活のメッセージを語ったのか——。簡単な理由はパウロ自身がその復活の目撃者だったからです。実際にどういったことが起こったのかを使徒の働きから順番に見て行きたいと思います。

・パウロの救い 使徒9：1-6

まず最初に使徒の働き9：1-6には、パウロの救いの様子が記されています。パウロが何の目的でダマスコに行こうとしていたのか——。そしてその途中に何が起こったのかをルカは私たちにわかるように記してくれています。その当時はサウロと呼ばれていたことが1節に出ています。「なおも主の弟子

たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれ」、何のためにかというと、「それは、この道の者（つまりクリスチャン）であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。」、つまりクリスチャンたちを迫害する許可をもらって、パウロはダマスコへと向かって行ったのです。3-6節「ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。』という声を聞いた。彼が、『主よ。あなたはどなたですか。』と言うと、お答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町にはいりなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずですよ。』」と。もう主イエス・キリストはとうに十字架に架かり、そして日数がたっているのです。サウロはここで生きておられるイエスのことばを聞いたのです。そしてこの時に彼は救いへと導かれるのです。ですからダマスコに行って多くのクリスチャンたちを捕らえて、彼らを迫害する目的でサウロはダマスコに向かっていた。ところがダマスコに着くなり、主イエス・キリストが約束の救世主であることを伝え始めるのです。

・パウロの証し

① エルサレムで、彼を殺そうとしていた民衆の前で 使徒22：6-8

まず、こうしてパウロ自身が復活の主に出会ったことを教えているのです。このメッセージをパウロはこの後繰り返し語っていきます。少し後ろ使徒22章でパウロはエルサレムにいます。そして彼を殺そうとしていた民衆に対してパウロは証しをするのです。もちろん千人隊長の許可をもらってするのですが、22：6-8に「ところが、旅を続けて、真昼ごろダマスコに近づいたとき、突然、天からまばゆい光が私の回りを照らしたのです。私は地に倒れ、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。』という声を聞きました。そこで私が答えて、『主よ。あなたはどなたですか。』と言うと、その方は、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスだ。』と言われました。」とあります。実際に自分が経験したことをパウロは、彼を殺そうとしていた民衆の前で語っている様子がここに記されています。彼が語ったメッセージはイエス・キリストはよみがえったのだというメッセージでした。

② ペリクス総督の前で 使徒24：15

また同時にユダの総督であったペリクスの前でパウロはこんな証しをします。24：15でパウロはペリクスに対して「また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。」と言っています。パウロが語ったことはただクリスチャンたちがいつかよみがえるという話ではない。すべての人がよみがえるということを語っていたということです。「善人」であっても「悪人」であっても、これは神を受け入れている者たちと受け入れていない者たちの話です。人類は二種類に分けることができます。神を信じている「善人」たちと神を信じていない、逆らい続けている「悪人」たちと。どちらも必ず復活するというのをパウロが語っていたこと。

③ アグリッパ王の前で 使徒26：8、12-18、23

また26章に移ると、今度はアグリッパ王様の前でパウロが証しをしている様子が記されています。26：8「神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。」、12-15節「このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があって、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』私が『主よ。あなたはどなたですか。』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』と。お気づきになったように、パウロは相手が誰であろうと、どんな地位の人であろうと同じメッセージを語るのです。そのメッセージはイエス・キリストは十字架で死に、そして三日後によみがえったというメッセージでした。

* フェストのパウロについての証言 使徒25：19

このペリクス総督の後任となったトルキオ・フェストという人物が、パウロがどんなメッセージを語っていたのか、アグリッパ王の前で語っているところが25章に記されています。私も読んだ時に思わずほくそ笑んだのですが、ちゃんとフェストはわかっていたということです。13節を見ていただくと、「アグリッパ王と（妹の）ベルニケが、フェストに敬意を表するためにカイザリヤに来た」話が書かれています。そしてこの二人に対してこのフェストがパウロについて話をします。25：19「ただ、彼と言争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きてるとパウロは主張しているのです。」とあります。フェストはちゃんとわかっているのです。なぜパウロが宗教家たちといろいろなトラブルに巻き込まれてしまっているのか、なぜそこに争いがあるのか。それはパウロ自身の語っているメッセージだと言うのです。どんなメッセージを語ったかということ、それは「イエスが生きてるとパウロは主張」した、ここが争点なんだと。このようにフ

エスト自身がアグリッパ王に語っている。なぜこんなことが起こったかという、パウロたちが何を語っているかをみんな知っていたのです。これがパウロたちのメッセージだったのです。

・ペンテコステでのペテロのメッセージ 使徒2：23、24、32

あえてパウロたちと今言ったのはどうしてかという、実はこのメッセージを語ったのはパウロだけではなかったからです。もう少し使徒のみことばを見ていきます。使徒2章はペンテコステから教会が誕生する話です。このペンテコステの時にペテロが語ったメッセージがこの2章に出てきます。23節「あなたがたは、神の定めた計画と神の予告とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。」、イエス・キリストを十字架につけて殺したという話をペテロがしています。24節「しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないから」、こんなふうにペテロ自身が語っています。また32節で同じペテロがこう言います。「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。」と。パウロがイエス様の復活を語ったのはパウロ自身が証人だったからです。生きておられる主と出会ったからです。ペテロも言うのです。私たちは復活された、死からよみがえられたイエス様を実際にこの目で見た証人だと。

・生まれつき足の悪い男を癒した後、ペテロが群衆に語ったメッセージ 使徒3：15

3章に進んでいただくと、今度ペテロとヨハネはエルサレムで神殿の美しの門に行きます。そこで生まれつき足の悪い男を癒してあげるのです。その癒しを見た多くの群衆はその癒しに驚いて当然ペテロとヨハネの周りに集まって来ます。彼らに対してどんなメッセージを語ったのかという3：15に「いのちの君を殺しました。（イエス様の十字架の話です）しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」と記されています。

・ペテロとヨハネが捕らえられた理由が記されてある 使徒4：2

この後、ペテロとヨハネは祭司たち宮の守衛長、またサドカイ人たちによって捕らえられていきます。なぜ彼らが捕らえられたのか、その理由が4：2に記されています。「この人たち（つまりこういった祭司長たち、祭司たちや宮の守衛長、またサドカイ人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、彼らに手をかけて捕えた。」、これが理由でした。なぜ彼らをつかまえたかという、彼らが「復活」の話をしていたからです。

・使徒たちがかたっていたメッセージ 使徒4：33

またペテロだけではありません。ほかの使徒たちもこのメッセージを語っていたことが4：33に記されています。「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みとそのすべての者の上にあった。」と。だからパウロのメッセージを見ました。パウロはイエス様の復活を語ったのです。ペテロのメッセージを私たちは見てきました。ペテロもイエス様の復活を語った。彼らだけではなく、使徒たち全員がこのメッセージを語っていたということです。

5章になると、ねたみに燃えて大祭司とその仲間たちは再び使徒たちを捕らえて留置場に入れるのです。そこには番人たちがいました。しかし、主の使いが現れて牢の戸を開いて彼らをそこから連れ出すのです。翌日、この出来事に当惑した大祭司たちは使徒たちを議会に立たせて詰問します。その時ペテロや使徒たちは次のように語った様子が5：29－30に書かれています。「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。『人に従うより、神に従うべきです。私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。』と。これが私たちが教会の始まりのところを見る時に、使徒たちが語っていたメッセージであったことが見て取ることができます。これが彼らのメッセージだったのです。彼らはイエス様の十字架と復活を語っていたのです。彼らは確信を持ってこのメッセージを語ったのは、彼らが実際にイエス・キリストの復活の御姿を見たからです。復活の主に彼ら自身が実際に出会っていたからです。ですから確信を持ってこの真理を語ったのです。そしてその真理のために彼らは喜んで命を捨てたのです。私たちは見たのだ、私たちはイエス・キリストの復活の証人なのだ。

☆もし復活がないとした場合の問題点

きょうのテキストに戻ると、復活を確信していたパウロも同様にこの13－15節、16－19節において復活の確実さと、もし復活がないとした場合の問題点を挙げています。もし復活がないとしたら大変だ、こんな問題が生じると。パウロはこのメッセージを通して、いかに復活が重要なのか、また、復活が我々の信仰の土台なのだとすることを明らかにするのです。

A. 「福音宣教の無意味さ」 13－15節

1. もし主イエスの復活が事実でなかったとしたら：

13－15節にパウロは、もしイエス様の復活が事実でないとしたら、私たちの福音宣教は全く無意味だと教えるのです。

1) 我々はよみがえらない 13節

というのは13節「もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。」、つまりイエス様が復活されなかったとしたら、我々もみんな死んですべて終わってしまう。我々はよみがえることがないのだと。もしイエス様の復活が事実でなかったら、我々はよみがえることなく死んで終わってしまう。我々は、よみがえって天国に行くのだと信じている者たちです。パウロは言うのです。イエス様がよみがえられなければ、それも絵空事であって事実ではない、死んで終わるのだと。

2) 無益な宣教 14節

二つ目の問題点は無益な宣教です。14節に「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。」とあります。「実質のないもの」というのが繰り返されています。「宣教は実質のないものになり」、「信仰も実質のないものになる」と。この「実質のないもの」というのはどういう意味かということ、「空しい」とか「役に立たない」、「むだの」という意味です。この「宣教」ということばを見て私たちがすぐに思うのは、出て行ってイエス様のことを伝える「宣教」の働きのことですが、この「宣教」という名詞はこの働きよりも彼ら自身が語ったメッセージの内容のことです。つまり彼らが語ったのはイエス様の十字架と復活を信じる信仰によって救われるというメッセージです。それが全く空しいもの、全く役に立たないものになるのだとパウロは言うのです。この後何度も繰り返しているのですが、私たちはイエス様の十字架と復活を信じたらその罪が赦されるのだと語るのですが、もしイエス様の復活が事実でないとしたら、そのメッセージは全く無意味だとパウロは言うのです。

同時に「信仰も実質のないもの」と書いてあります。「信仰」というのはそのことばが示しているように、福音を信じて主に従い、主の弟子となる、救われるという話です。パウロが言うのはもしイエス様の復活が事実でなければ、あなたの救い自体が空しいもの、あなたの救い自体全く役に立たないものと。我々みんなこの救いにあずかった私たちはイエスを信じることによってすべての罪が赦され、永遠の命と天国が約束されたと信じています。しかしパウロはもしイエス様の復活が事実でないとしたら、救われているとあなたは思っているだけで本当は救われていないのだと。あなたの信じているものは、あなたを罪から救い出す、そんな効力がないと。あなたは死んだ後天国で永遠を過ごすと思っ込んでいられるけれども、でもそれは事実ではないと。だとしたら空しいと思いませんか？我々が宝としているこの信仰が我々を救ってくれないとすれば。

なぜ、もしイエス様の復活が事実でなければ、宣教も信仰も実のないもの、全く空しいもの、全く役に立たないものなのか——。その理由は簡単です。もしイエス様がよみがえっていないとして、イエス様のからだはまだあのエルサレムの墓の中に納められているとするならば、イエス様は救い主ではなかったのです。救い主でない人を幾ら信じてもそこに救いがあるはずはありません。どんなにその人が救いを与えるのだと言っても、まだそのからだは墓の中に入っているのだったら、彼は救い主ではなかったのです。そんな人を信じてもそこには救いはないのです。嘘に基づいた教えに力はありません。だから皆さんよく考えてみると、私たちの周りに存在し、我々自身も信じてきたさまざまな宗教は一体誰が考え出したのですか？偉い人間だと言うかもしれない。でも人間が考え出したものに救いはありません。なぜなら彼らのからだは墓の中にあるからです。人間が考え出したもの、そこに真理はありません。それはあくまで人間の考えに過ぎないからです。ですからパウロは言うのです。イエス様がもし死からよみがえって来なかったとしたら、復活されていないとすれば、我々の宣教も我々の救いもすべて全く空しいものだと。

3) 偽証の罪：神のみわざへの偽証 15節

三つ目の問題点は、15節、それは偽証の罪を犯すことになると言うのです。「それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。」と。「偽証をした」というのはここに書いてあるように「偽りの証人」ということです。見ていただきたいのは、「ということになります」という動詞は日本語ではこんなふうに使われていますが、このことばは、以前は知らなかったことがわかるとか、以前は知らなかったことを知るという意味です。観察をして、また考えとか、聞くことを経験してわかるという意味があります。ということかということ、イエス様はよみがえったのだと信じて語っているけれども、後になって、それが事実ではなかったとした時に私たちは真実を語っていなかったということを知ります。神について偽証した。少し考えてみると、我々は周りを見渡してみると、いろいろな人たちがこれが真理だという教えが存在します。そしてそれが本当なのか、それとも嘘なのか、それがわかる時が必ず来るのです。私たちが神の前に立った時に、いやそれよりもっと前に自分たちが語ってきたことが本当なのか、全くの嘘だったのかわかるのです。もし私たちがイエス様がよみがえっていないのによみがえったのだと信じてそのように語っていたら、必ずそれがわかる時が来るのです。それは死んだ時にわかつていと思いませんか？なぜ

ならその人たちは死んだ後私は天国に行くのだとみんな思っているのです。でも死んだ時に別のところにいたらどうします？自分が信じていたこと、自分が語ってきたことが真実ではなかったことに気づくのです。

パウロはこの15節でもし私たちが真実でないことを語っているとしたら、我々は神に嘘をついたことになる。我々は真理ではなくて偽りを証しする者たちであった。「なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら」、先ほど私たちが見て来たように、もしも人間が死んでそれで終わってしまうのなら、神は絶対にキリストをその死からよみがえらせることをなさらなかったと。ということは逆説的に見ると、イエス様がよみがえって来たということは、繰り返しになりますけれども、人は皆よみがえるということを明らかにするということです。

ここで「もしもかりに」ということばに注目していただくと、パウロは死者の復活を確信した、あえてここでまたこういう仮定法を使って、この復活を信じていない人たちの愚かさを明らかにするのです。彼はもし死者の復活がないとしたら、イエス様をよみがえらせることを神は絶対になさらなかったと言います。でも私は実際にイエス様の復活を見たし、それをあなたたちに伝えてきたでしょう？と。なぜそれでもまだあなたたちはそれを信じようとしませんか。もし私たちが事実でないことを語っているならば、我々が本当に見たと言っているが実際は見えていなかったとしたら、我々はみんな嘘つきだと。「神に逆らう証言をした」と書いてあります。これは神に反する、神に反対するということです。神が言っておられることと全く違うこと、それに反することを語ったり行ったりすると。真理ではなく神についての偽りを伝えている。もしそうだとしたら、その人は嘘つきです。そんな人が神を愛していると言えます？神様を愛している人というのは、神様の真理を語りたい、神についての真理を語りたい、それが我々の願いではないですか？真実でないことを語りながら、私は神様を愛していますと言えます？もしそんなことが言えるとしたら、その人は最大の偽善者だと思いませんか？神を愛している者は神の真理を喜ぶのです。神の真理を喜ぶゆえに私たちは神の真理を伝えたいのです。パウロは私たちは主イエス・キリストの復活を見た、疑いのない事実だと。でもあなたたちの中でそれを信じない者がいる。ではもしもイエス様が死からよみがえって来なかったとしたら、人間みんなが死んだら終わってしまうと。そしてもしイエス様が本当のよみがえって来なかったとしたら、私たちはよみがえったと言って、この神に対して嘘をついたことになる。パウロはこうして、もしイエス様の復活が事実でなければ、こういう問題点が起こるのだということを13-15節まで話すのです。

B. 「救いの無意味さ」 16-19節

その上で16-19節でも、同じように、もしイエス様の復活が事実でないとしたら、こういった問題点があるのだと。まとめて言えば、それは救いの無意味さなのです。福音宣教だけでなく、実際救いの無意味さについても改めて16節から語っていくのです。16節を見ると、「もし、死者がよみがえらないのなら」と書いてあります。13節は「もし、死者の復活がないのなら」とあり、「復活」という名詞を使っていました。16節は「よみがえり」という動詞を使っています。でも言いたいことは同じです。もしイエス様の復活がないなら、イエス様が死からよみがえって来なかったら、特に我々の救いに関してこういう問題点があると。

1. 「罪の赦しがない」 17節

一つ目に彼が言うのは我々の信仰には救いがないと言うのです。17節「そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。」とあります。見て来たようにイエス様を信じることによって救われるというこの「信仰」です。もしイエス様がよみがえって来なかったとしたら、まだ墓の中におられるとしたら、あなたや私が信じているこの信仰は全く無意味だ、全く空しいものだ。今もなお自分の罪の中にいる、それがこのことがその理由だと言うのです。ですからイエス様を信じたら罪が赦されるというのに、実際のところは赦されていない。こんな空しいことはありません。救われたと私たちは喜んでいながら実は救われていなかったと。パウロが言うのは、もしイエス様がまだ墓の中にいるとしたら、あなたが信じていることは全部空しい。あなたには罪の赦しを与えられていない。ということは罪の赦しというのは、このイエス様の復活にかかっているのです。

2. 「永遠の地獄へ」 18節 黙示録20:10、15

二つ目に彼が言う問題点は、18節、もしイエス様がよみがえっていないとしたら、我々はみんな地獄だと。「そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。」と書いてあります。「眠っ」ているという表現は聖書の中によく見られますが、これは肉体的な死を指しています。肉体的に死んだ者たちを「眠っ」ていると言います。なぜかという、「眠っ」ている者は必ず起き上がるでしょう？つまり死んだ者も必ずよみがえらせるから、聖書では死についてはこのように「眠る」という表現を使うのです。また、パウロがここで言っているもう一つを見ていただきたいのですが、「キリストに

あつて眠つた者たち」というのはイエス様を信じて既に肉体的な死を経験した者たちの話です。イエス様を信じて、もう既に亡くなった人たちの話です。では彼らはどうなったのか——。彼らは、「滅んでしまった」と書いてあります。これは永遠の悲惨を自分に招く、つまり死を自分に招くということです。つまりパウロはイエス様の復活が事実でないとしたら、イエス様を信じて既に亡くなった人たちはみんな「滅んでしまった」、永遠の神のさばきの中に入ってしまった、いろいろな表現が使えるでしょう。でも少なくとも彼らの運命ははっきりしています。彼らは救いをいただいたのではなくて、彼らは永遠のさばきへと向かつて行つたと。

私たちは聖書の学びを通して最後のさばきの時までイエス様を信じなかつた者たちがどこに行くのか知っていますよね？炎の中で熱くて苦しつてたまらない状態が続いていると、ハデスの中で苦しみ続けていると。それが終わり、永遠の状態ではなくて、永遠の状態はその後によつてくるのです。最後の審判があるのです。最後の審判を経験した者たちはその後、永遠の地獄へと送られて行くのです。そのことは黙示録20：10に「彼らに感化した悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。」「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」（15節）とあります。「火の池」と記されています。そこは「悪魔」、サタンもサタンの使いたちも皆永遠を過ごすところだと。そこで「永遠に昼も夜も苦しみを受ける」と。だから救われていない者たちは、そこで永遠を過ごすのです。楽しい宴会をしながらとか、そこで出会つた友人たちと楽しく話しながらとか、そんなことを聖書は一切教えていない。大変な苦しみが永遠に続く。ですから、パウロが言うのはもしイエス様の復活が事実でないとしたら、救われていると思つて既に亡くなった人たちがみんなそこに向かつているのだと。それがメッセージです。

3. 「哀れな人生」 19節

そして三つ目の問題は19節「もし、私たちがこの世にあつてキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」と言っています。「一番哀れな」というのは最も惨めな存在、最も不幸な存在だということです。なぜかという、この世にあつてキリストに単なる希望を置いているだけだからです。先ほどもお話ししたように、我々クリスチャンは死んでも生きるのだ、そのような希望を口にする者です。私はイエス様とともに永遠を過ごすのだ、そのような希望を私たちは口にします。でも私たちが死を迎えた後、それがなかつたとしたらどうです？我々は大変惨めな人生を過ごしたことになるのです。悲劇と言つたことばでは表せないほどの悲しみです。目を覚ました私はイエス様のもとにいたと思つたのに、炎の中、苦しみの場所にいるなんて。その時に多くの人たちは思うでしょう。私はイエス・キリストを信じて、このイエス・キリストが救い主だと信じて、この方によつてすべての罪を赦していただいたと信じて、私は天国に行つて永遠を過ごすのだと信じてさまざまな迫害にも、さまざまな孤独にも、さまざまな涙にも絶えてきた。でもそれはみんな嘘だつたと。そんな苦しみを受ける必要はなかつた。そんな迫害も、そんな孤独も、そんな涙も、もしイエス様のみからだがあつてもあの墓の中にあるのだつたら、もしイエス様のみからだがあつてもその墓の中から敢然とよみがえつて来なかつたとしたら、我々のすべてのことは空しいと。我々は最も惨めな、最も不幸な人生を送つた者たちだ。

C. 「キリストの復活の事実」 20節

13-19節までを見て、恐らく皆さんが一番お気づきになつた接続詞は繰り返される「もし」だと思つています。20節を見ると、もう「もし」はありません。「しかし」という接続詞で始まります。「今やキリストは、眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と。「よみがえられました」と、受け身の完了形が使われています。主イエス・キリストを父なる神がその死から敢然とよみがえらせてくださった。過去に起こつた事実なのだ、パウロは宣言するのです。イエスの復活が嘘偽りのない真実であることの宣言です。もしイエス様が死からよみがえつて来なかつたとしたら、いろいろな問題がある。我々の福音宣教の働きも全部空しいし、我々は神の前に嘘をついたということで大きな罪を犯したことになる。そして赦されたと思つていながら実は罪の赦しをいただいていないし、天国に行くと思つていたら、実は地獄に向かつているし、そして自分の人生を振り返つたら本当に空しい人生を送つたと。事実でないことのために自分のすべてをかけてきたと。そのようにパウロは仮定法で語つた上でこう言います。「しかし、今やキリストは、眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と。兄弟姉妹たちよ、聞きなさい、イエス・キリストは敢然とあの死から肉体を持ってよみがえつてくださった。勝利の宣言と思えるようなパウロのメッセージです。もしその復活がなければ大変なことです。でもパウロは、復活は実際に起こつた、私たちはそれを見たと言つています。

パウロはこの復活の目撃者であり、そしてこの復活によつて、イエスの救いにあづかつた者です。この希望を持って生きる者へと生まれ変わったのです。ここに「初穂」ということばが出ています。なぜこのことばが使われているかという、その後によみがえりが続いていくからです。このことについて

は次回ご一緒に見ていきます。主イエスを信じるあなたはよみがえり、主とともに永遠を生きていくのです。信仰者の皆さん、我々が覚えなければいけないのは、主イエス・キリストが死から敢然とよみがえられたことによって、主が語っておられたことがすべて真実だったということを証明したのです。我々が何回も見てきたように、イエス様が語ったことが本当であったかどうかを証明することは、この復活が起こったかどうかなのです。多くの人間は立派なことを語るでしょう。でも死んで終わったのです。イエス・キリストだけは復活によって、ご自分が語っておられたことがすべて真実であることを証明したのです。だから私たちはイエス様の言われたことを信じることができますのです。またあなたが一生懸命これまでになして来られた福音宣教の働きは決してむだではなかった。あなたは真実を語って来られたからです。あなたの信じた信仰は間違いではなかった。あなたは真実を信じたのです。あなたの語った主イエス・キリストの復活のメッセージはむだではなかったし、真実だったからです。あなたの語った福音は信じるすべての人に永遠の地獄からの救い、永遠の滅びからの救い、永遠のいのちを確かに与えるものだったのです。嘘を語っていたのではないのです。十字架に架かり、そこからよみがえられたこのイエス・キリストを私たちは語ったのです。

皆さん、イエス様がその死から敢然とよみがえって来られたことによって、イエス様が語っておられたように約束の救い主だということを明らかにしてくださった。パウロはこんなことをローマ書4：25で言っています。「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、」、イエス様は私たちの罪のために死に渡された。十字架に私たちの身代わりとなって架かってくださったという話です。そして「**私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。**」と続きます。つまりイエス様を信じることによって私たちは罪赦していただいて、このすばらしい義なる神の前に聖い者として立つことができる。その救いを私たちがいただくためにイエス様はその死から敢然とよみがえって来られたと。ですから皆さんは、きょう、このイエス様の復活がどうして重要なかがおわかりになったと思います。イエス様の十字架と復活、これこそ私たちの福音の根幹であり、我々が信じただけでなく、主から託されたメッセージ、語るべきメッセージだということです。

最初に我々が見てきたように、なぜパウロが、なぜペテロが、なぜ使徒たちが何千年にも渡って主イエス・キリストの十字架と復活を語り続けてきたのか——。このメッセージを主は信じた我々ひとりひとりに託してくださったからです。マルコ16：15でイエス様が「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」と言われた。それを聞いていた弟子たちはどうしたかということ、20節「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。」と記されています。こうして福音が世界に広がっていったのです。救い主が来られたのだと。イエス・キリストによって私たちの罪は赦され、なぜならばイエス・キリストだけが身代わりとなって十字架で死んでくださり、イエス・キリストだけがその死から敢然とよみがえって来られた救い主だからと。このメッセージを人々は語り続けたのです。私たちは証人だと、我々は見たのだと。あなたも私も主イエス・キリストの証人です。確かに私たちは使徒たちのように主の復活を目撃していません。我々は死からよみがえって来たイエス様をこの目で見たことはありません。でも、主によって約束された新生——新しい生まれ変わりの証人なのです。私たちはイエス様を見ていないけれども、私たちはイエス様を信じることによって生まれ変わったことを人々の前に示す証人なのです。こんなどうしようもない私を神様は生まれ変わらせてくださり、我々はそのことを人々の前に示すのです。なぜならそれが私たちに起こったことでしょうか？あなたも私もイエス様によって生まれ変わったではないですか？私たちはそれを人々に見せていくのです。示していくのです。なぜなら我々は新しく生まれ変わった証人だからです。イエス様が言っておられたそのことが真実であることを証しする者たちだからです。

そして、ひょっとしたらどなたかこの中にあってさばきはないと信じておられる方がおられるかもしれない。あなたは自分のよみがえりを覚えて、その備えをしなければならぬのです。なぜかということ、イエス様の復活というのはすべての人がきょう見てきたように、死後必ずよみがえるのだということ、そしてその後必ずさばきが待っているのだということ、これを証明したのです。イエス様がよみがえって来たことは我々もみんなよみがえることを明らかにしたのです。よみがえって、何ががあります？神からのさばきです。パウロはアテネの町で、使徒17：31に「**なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。**（さばきがあると）そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになった」と言っています。必ずすべての人がよみがえり、必ずすべての人が神のさばきを受ける。それが本当に起こることがどうやってわかるか、それが事実かどうかどうやってわかるのかということ、主イエス・キリストの復活によってです。イエス様が死からよみがえって来られたことがこれを明らかにしてくれたのです。まだイエス様を知らない人、イエス様に背を向けているあなたが肉体的な死を迎えた時に、次のようなことがあなたに起こるのです。それは、天国に行けると信じ込んでいたあなたは、目を開いた時に、自分の

いるところは天国ではなくて炎の燃えている苦しみの中にいることがわかり、自分の信じてきたことが間違っていたことにその時に気づくでしょう。天国に行けると思っていたのに実は違った。最後のさばきの時に、自分が信じてきたものは単なる天国への希望をもたらしただけで真実ではなかったということに気づきます。しかし、その時はもう手遅れです。

先ほどのアテネで語ったメッセージの後にパウロはこう言います。「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」（使徒 17 : 30）、これが神のメッセージです。そしてなぜ神がこんなメッセージを今も語っておられるかというと、今はまだ救いのチャンスがあるからです。今はまだ神様はあなたのすべての罪を赦してくださるからです。だからあなたに心からお勧めすることは、手遅れになる前に罪を悔い改めてあなたの身代わりとして十字架で死んでよみがえられた唯一の救い主、主イエス・キリストをあなたの救い主、あなたの神、あなたの主人として信じて従う決心をすることです。

きょう私たちはイエス様の復活のことを改めて見てきました。我々はみんなよみがえるのだと。私たち、救いにあずかった者たちはその日を待ち望んでいます。なぜなら私たちが目を覚ました時に、どこにいるかはっきりしているからです。イエス様のもとにいます。なぜならイエス様は十字架であなたの身代わりとなって死んでくださっただけでなく、その死から敢然とよみがえって来られ、今も生きておられるまことの神であり、救い主だからです。この方によってのみ罪の赦しをいただくことができます。主に感謝を持って歩み続けてください。主の証し人として歩み続けてください。